

令和元（2019）年9月13日（金） 大会二日目

10:45~12:15

**セッションC1 公共人材② 23204 教室**

---

座長 三好勝則（工学院大学）

稲葉陽二（日本大学）

---

**C1-1** 地域の「よりあい」における創造性の研究—よりあいから未来をつくるには—

○新村佳嗣 鵜飼修

滋賀県立大学 近江環人地域再生学座 滋賀県立大学 地域共生センター

**C1-2** 地域診断法ワークショップを活用した小学校におけるまちづくり学習プログラムの開発

○鵜飼修 小島なぎさ

滋賀県立大学 一般社団法人まちづくり石寺

**C1-3** 街づくりにおけるシビックテックの実態と持続可能性に関する研究

○川島宏一 赤平賢人

筑波大学システム情報系 株式会社ファーマインド

# 地域の「よりあい」における創造性の研究

## ーよりあいから未来をつくるにはー

A Study of Creativity for YORIAI in Local Community  
:For Create Future at Local Community

○新村 佳嗣 滋賀県立大学 近江環人地域再生学座  
鵜飼 修 滋賀県立大学 地域共生センター

### 1. 背景

IT技術の向上とスマートフォンの普及により「答えを検索する」という行為はまさに生活の一部となった。またビッグデータの活用とAIの目覚ましい進化によって、これまで高い専門性と経験が必要とされていた「無数の選択肢の中からひとつの最適解を見つける」といった能力までもがコモディティ化しようとしている。こうしたテクノロジーは、最適解が存在する小売、エネルギー、金融、医療、物流などの分野で目覚ましい生産性向上をもたらしている。

一方で、まちづくりに代表されるような複雑・多様化した課題には、万能な解決モデルが存在しない。空家、少子高齢化、地域経済といったテーマは共通しているものの、そもそも一つとして同じ地域はなく、地域の数だけ課題とビジョンが存在するといっても過言ではない。このような「答えにも多様性がある」分野に対しては、最適解を検索し適用するアプローチでは不十分であり、AIのようなテクノロジーもまだ救世主たりえない。

こうした複雑・多様化した課題に対し注目されているのが、デザイン思考 (Design Thinking) をはじめとする創造性による解決アプローチである。デザイン思考は、どこかの解決モデルを適用するのではなく、課題を洞察し、思考し、ビジョンを描き、実験を繰り返す、新しく答えを創造することで課題を解決する手法である。

この手法導入の流れはイノベーションを必要とするビジネスの分野で一足はやく見られる。経済産業省でも2018年から「新たな発想で事業課題を創造的に解決できる人材」として「高度デザイン人材」の育成に取り組んでいる。既存のやり方を効率化する管理型経営から、デザイン思考などによって組織の創造性を高め、新しい価値創造をおこなうデザイン経営へシフトしようというものである。

一方、まちづくりにおいても、道路建設や圃場整備といったハード・インフラ整備中心の時代では、専門家や行政がトップダウンで主導し、住民の参加といえば専門家のプランづくりに関与するか、プランを実行するオペレーターとしての立場が主だった。

しかし、地域課題が多様化するとともに、まちづくりに「地域らしさ・つながり」といったソフト・価値創造が求められるようになると、こうした専門家主導型のアプローチが思ったほどに効果をあげないことが明らかになった。

こうした問題に対し、山浦<sup>1)</sup>は、その地域の専門家である住民自身がビジョンを描き、まちづくりの主体となること、すなわち「住民主体の課題解決」が多様化する地域課題に対して必要なアプローチであり、ひいては地域らしさを醸成する源泉になると説いている。

### 2. 問題意識

そうした「住民主体の問題解決」の必要性から、住民の創造性をファシリテートする手法としてファシリテーターの介入やまちづくりワークショップが発達してきた。

しかし、長畑<sup>2)</sup>が指摘しているように、まちづくりは常にこうしたプロの支援者や機会に恵まれるわけではない。また、予算を必要とする支援は永続できるものではなく、いつかは住民たち自ら

で、自分たちの創造性をファシリテートしなければならない。つまり、まちづくり活動のどこかに「住民自らが創造性を促す機能」を組み込むことが必要なのである。

まちづくり関係者が話し合う最もポピュラーなものは「よりあい（集落や自治会などのコミュニティにおいて、その関係者が同一の目的をもって集まり協議し意思決定する場）」ではないだろうか。このよりあいを価値創造の場にできれば、各地のまちづくり活動は非常に多様性にあふれた面白いものになると考えられる。

しかし、実際の「よりあい」の多くは配布された次第に沿って進み、多数決と場の流れで議題が処理されていく。地域課題が議論の中心になるとほとんどの時間を沈黙が支配し、一言も発しない参加者たちは各自の様子を伺う。新鮮味のない活動の継続が了承され、未来を変えるかもしれない大胆なプランは各人の頭の中だけに存在している。一体何が「よりあい」から創造性を奪っているのだろうか。

そこで本稿では「よりあい」を活性化するには何が必要か、何が「よりあい」の創造性を妨げているのかを考察する。

### 3. 研究目的と方法

本稿は住民やまちづくり関係者の創造性が、「よりあい」の中でどのように発露し、促進され、または阻害されるかを明らかにする。

そのために、まず、創造性に関する先行研究を調査し、「創造的なよりあい」を定義するとともに、創造性の阻害要因について整理する。続いて、実際のまちづくりの現場に赴き、「よりあい」に参加し、映像での記録とあわせて観察し、定義内容の出現と、阻害要因がどのように影響をしているかを明らかにする。そして、それらの検証を通じ、「よりあい」における創造性を促進させるための要点を明らかにする。

この要点が明らかになれば、住民をはじめとするまちづくり関係者が創造性の特徴を知識として理解することで、住民たち自らが「創造的なよりあい」を行うようになり、住民主体の課題解決に向けた土壌とすることができる。

なお、本稿はファシリテーターの介入やまちづくりワークショップを否定するものではなく、むしろその効果を活動につなげ、持続的なものを目指すものである。

### 4. 創造性研究の現状と定義

創造性は非常に興味深いテーマでありながら、その性質の複雑さ、定義の困難さ、学術的検証の難しさにより、まちづくりに限らず、どの分野からも等閑視されているのが現状<sup>3)</sup>である。

まちづくり分野においては、ファシリテーターやよりあいワークショップの与える影響を検証した研究に、創造性に関する見られる記述もあるが、そもそも創造性は定義の難しい概念であるため、その表現も創造的と言われる現象も多様性に富んでいる。

そのため本稿ではKJ法で知られる川喜多二郎の創造的行為の三ヶ条<sup>4)</sup>を創造的な行為の基準とし、そこから「創造的なよりあい」を定義したい。

#### 4-1. 川喜田二郎 創造的行為の三ヶ条（創造性とは何か（2015）祥伝社より抜粋）

川喜田二郎によれば、創造的行為は以下の3つの条件が必要とされている。

- 第一条 自発性            その仕事を自発的に行う
- 第二条 モデルのなさ    モデルや手本が存在せずマニュアルもない。
- 第三条 切実性            自分にとって切実である

この創造的行為の三ヶ条を要約すれば、「モデルやマニュアルがない中でも自発的にかつ自分事として取り組む行為」を指し、まさに昨今、住民主体のまちづくりに求められている姿勢そのものであると言える。よってこれらの姿勢に基づいて行われるよりあいを「創造的なよりあい」であるとし、次のように定義した。

#### 4-2. 本稿における「創造的なよりあい」の定義

川喜田の条件を踏まえ、本稿における「創造的なよりあい」を定義すると以下のようになる。

- ①住民みずからが課題を認識し、ビジョンを描き、アイデアを考える場であること。
- ②どこかの真似ではなく、新しい取り組みやアイデアを歓迎する雰囲気であること。
- ③行政等の要請ではなく、住民たちのニーズやビジョンにもとづく議論であること。

本稿では、これらの条件を踏まえて、実際の現場において参与観察を試みる。

#### 5. 創造性の阻害要因

一方で、なぜモデルやマニュアルがない地域課題に対して住民は創造的になれず、新しいアイデアが歓迎される雰囲気とは程遠いよりあいが行われるのか。そのヒントをイノベーションが要求されるビジネスの世界から求めたい。

競争を増すビジネス分野では、創造性は業界を問わず今日のリーダーに最も必要な特質であるとされ、学術的か否かを問わず「どうすれば創造的になるのか」について盛んに議論されている。なかでもデザイン思考を世に広めた IDEO のデイビッド・ケリーがスタンフォード大学に開設した d スクールは創造性教育において世界的に有名であり、創造性を取り戻すための支援が体系的に行われている。

デイビッド・ケリー<sup>5)</sup>によれば、創造性とは本来誰でも有している能力であり、それが発揮されないのは表1の「四つの恐れ」によるものであると分析している。

表1 創造性を阻害する四つの恐れ

- |   |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>1. やっかいな未知なるものへの恐れ</li> <li>2. 評価されることへの恐れ</li> <li>3. 第一歩を踏み出すことへの恐れ</li> </ol> |
|---|

この恐れに対処し克服することができれば、人は本来の創造性を取り戻し「モデルやマニュアルがない中でも自発的にかつ自分事として取り組む」ことができる」と提言している。

#### 6. 参与観察

##### 6-1. 観察対象地の概要

実際のまちづくりの現場である T 町 M 集落で参与観察を行った。

T 町の M 集落は T 山の西に位置する人口 80 人ほどの小さな集落である。隣の S 集落から延びる一本道が M 集落唯一の玄関口であり、周囲を急峻な山で囲まれた谷地に山からの湧水がおちあう川が流れている。その川に沿うように一本道がのび、その道なりに集落が構成されている。平地の乏しさと日照時間の短さから農業は盛んではなく田は集落内に見られない。

この集落では 2018 年 10 月にまちづくり WS が行われ、いくつかの地域ビジョンを定めた。本研究はその WS 以降から現在まで毎月第 3 金曜日継続して行われているよりあいに参与し、その中で住民や関係者の創造性がどのように発露するか観察した。

##### 6-2. 参与観察の概要

M 集落では 2018 年 4 月 28 日から集落活性化を目的として M 集落住民と T 町役場担当者が M 集落公民館で毎月 1 度まちづくりよりあいを行っている。ここでのよりあいは通常 M 集落住民 6 名、T 町役場 5 名が出席し、I 字型に並べた長机に相對して行われる。役場職員司会のもと役場が作成した次第に沿って進み、第 6 回までは T 町役場の協力のもと、住民への聞き取り調査や集落内の現状把握、過去の活動の振り返りがなされている。

同年 10 月 7 日に役場と M 集落の住民、滋賀県立大学関係者によるまちづくり WS が開催され、M 集落の課題や地域資源、および地域のビジョンが住民、役場に共有された。

参与観察はこの WS 直後に行われた同年 10 月 19 日開催の第 7 回よりあいより行った。

第 7 回よりあいには WS を担当した滋賀県立大学の U 准教授が出席し、「M 集落の地域資源を活かし、集落活性化と住民の健康増進を両立する活動を考えられないか」という助言を行った。この助言は M 集落のニーズに合致していたため、以降のよりあいは現在まで「地域資源を活用した集落

活性化と住民の健康増進を両立する活動（以後、健康まちづくり活動）」をテーマに進むようになっている。

健康まちづくり活動はモデルになる事例もなく、M集落もT町役場もはじめての新しい取り組みである。また、集落の美しさを地域外の人に知ってもらいたいという自発的な意見もあった。この活動は川喜田のいう創造的行為の三ヶ条をすべて含んでおり、住民らによる「創造的なよりあい」を必要とするステージに立ったことになる。

現在の健康まちづくり活動は、集落の自然を楽しめるウォーキングコースの整備を中心に行われている。集落内外からM集落の美しさを肌で体感し健康につなげることが目的で、新たに林道を整備し、看板の設置やルートマップの作成、景観保全が目下の取り組みである。

ここに至るまでの参与観察の結果、M集落におけるよりあいにおいて創造性の促進要因と阻害要因の両方が見られた。まず促進要因は①否定されない雰囲気②ビジュアルで示す③既知の活動の拡張である。①M集落は住民同士の一体感があり、意見を頭ごなしに否定するメンバーは存在しない。このため一度活動の方向性が決まると、自然とプレストのようにアイデアが出る雰囲気が醸成されている。看板の設置やマップの作成はこうして決められた②当初はルートを口頭で説明していたが、会場内のモニターで集落の航空写真を投影して説明するようになった。これ以降、全ての活動でモニターを使うようになり、いつしか住民が自主的にパワーポイントを作成してよりあいに臨むようになった。③ウォーキングコースの整備は新しい取り組みだが、林道の整備は集落内に経験者があり、機材も調達可能だった。よりあいでは短時間で作業日まで確定させ、非常にスピーディーに取り組みが行われている。作業前後の様子をモニターで投影するようになったことも進捗を実感でき、活動を促進していると考えられる。

阻害要因としては①未知の活動、②消極的助言が確認できた。①集落来訪者に向けたコミュニティビジネスを企画する要望が一部の住民から出るものの、商いの経験がないため慎重を求める意見が多い。林道整備との比較から、活動の難易度そのものよりも、活動の勝手がわかる否かが創造性の発露に影響していると考えられる。②またコミュニティビジネス創業の補助金情報が持ち込まれた際に役場職員から発せられた「難しいとは思いますが」との消極的助言が、

未知なるものへの恐れを増長し、創造性を阻害していると考えられる。

以上のことからM集落においては、主に「未知なるものへの恐れ」が創造的なよりあいに影響を与えていると考察された。また、新しい活動であっても既に勝手がわかる要素が含まれていると、そこを起点に恐れに対処でき創造性が促進される可能性が示された。

## 7. まとめと今後

ビジネスとまちづくりでは単純に比較できない点も多いが、本研究からよりあいにおいてもこうした恐れが創造性を阻害していると考えられる場面が観察できた。それは同時に住民や関係者が恐れの原因を知覚し克服することができれば「創造的なよりあい」につながるのではないかと考察される。また、こうした恐れが発生する要因のうち、環境や雰囲気、ツールの活用によって、ある程度は対処することが可能ではないかという仮説が考えられ、今後の研究では有効な対処法やツールの検証を行っていく。

## 8. 参考文献

- 1) 山浦 晴男 (2015) 地域再生入門一寄りあいワークショップの力：ちくま新書
- 2) 長畑 誠 (2015) ファシリテーション再考～「ファシリテーター」から「ファシリテーター的な場作り」へ～：ガバナンス研究 No. 11
- 3) 孫媛, 井上俊哉 (2003) 創造性に関する心理学的研究の動向：NII Journal No. 5 (2003. 3)
- 4) 川喜田 二郎 (2010) 創造性とは何か：祥伝社
- 5) トム・ケリー, デイビッド・ケリー, 飯野由美子 訳 (2014) IDEO 流 創造性を取り戻す4つの方法：ハーバード・ビジネス・レビュー

## 地域診断法ワークショップを活用した 小学校におけるまちづくり学習プログラムの開発

Effect of Learning Program for Sustainable Community in Elementary School Using  
Regional Diagnosis Workshop

○鵜飼 修 滋賀県立大学 地域共生センター  
小島 なぎさ 一般社団法人まちづくり石寺

### 1. はじめに

情報網や交通の発達で、世界中どこにでも行くことができ、どこの国の人もつながることができるような時代となった。AI やロボットなどの技術開発もますます進んでいくと予想される。そうしたグローバル化した社会で、私たち日本に住むものにとって大切なことは、「日本らしさ」の継承だと考える。日本という東洋の辺境の島国という特殊な環境で、長い年月で育まれた文化、伝統、暮らしが世界に誇れるアイデンティティとなる。しかし、日本全体は人口減少社会に突入し、そうした暮らしを紡いできた地方からは首都圏に人材が流出し、ますます衰退していくのが現状となっている<sup>1)</sup>。

日本らしさを継承する人財（あえて財とする）をどのように確保するのか。その一つの方法として、子どもの頃から「自分の地域」に「つながり」と「関心」をもってもらい、将来、進路の選択や、転機が訪れたときに、地域とのかかわりで「あのとき地域でこんな提案したな」「あの地域にもどって何かしよう」という記憶や思いを持ってもらうことが大切だと考える。グローバル化した社会の中で、自分自身の中に「地域」を持ってもらえれば、持続可能なまちづくり、日本らしさの継承への一助になると考える<sup>2)</sup>。

この考えを背景に、小学校高学年の総合的な学習の時間で活用するために開発した「まちづくり学習プログラム」マニュアル<sup>3)</sup>を開発した。プログラムでは「地域診断法ワークショップ（以下、地域診断法 WS）」という手法を用いている。このプログラムは、グループや外部の方々に関わりながら、客観的な情報を収集・整理・分析・統合し、「あらたな発想」を生み出すという一連の思考を訓練する仕組みとなっている<sup>4)</sup>。この実践を通じて地域を舞台に、児童の主体性、コミュニケーション力、そして創造力を育むことをねらいとしている。本稿では、プログラムの仕組みと概要を紹介するとともに、実践結果からその効用を考察する。

### 2. プログラムの仕組み～地域診断法の考え方

プログラムの基本としている地域診断法における「地域の構造」の考え方を紹介する。

私たちの暮らす地域には、そのベースとして、山や川、海、土地などの自然環境があり、そこに吹く風や雨があり、その環境に適応できた植物や動物が生きている。そこに食糧や安全を求め人々が暮らすようになり、社会・文化が生まれ、現在の形になっている。現代の私たちは自然環境に依存しない暮らしが可能となったため人間中心の生活感覚を持ちがちであるが、もともとは、自然環境、植物や動物からの恵みで、暮らしが成り立っていた。農業や漁業、林業といった一次産業や、文化はその象徴といえる。この視点を整理すると、地域には、地形や地質といった「地学」的特性、天気などの「気象」的特性、動植物などの「生態」的特性があり、そしてその上に文化や暮らしといった「人為」的特性があるという構造であることがわかる。このような地域の構造の捉え方をすることが「地域診断法」を実践する際の基本的な考え方となる。

地域診断法とは、生態学を重視した視点と地域を様々な情報に分解、整理、分析・統合することにより、地域の特徴を明らかにする手法である。この手法を応用し、その理念と仕組みを

継承しつつ、地域住民参加型で簡易に実施できる手法として開発されたのが地域診断法 WS である。WS は 5 つのステップで構成され、ヒアリングやフィールドワークを行いながら、地域を様々な情報に分解する作業と統合する作業を通じて「未来に継承したい〇〇地区の△△△△」は何か、すなわち地域の目指すべきビジョンを描く。地域づくりでの現場では、それぞれの地域の特性を活かした地域づくりが求められている。その際には、地域がビジョンをもち、そこに向かってバックキャストで活動を行うことが必要となる。地域診断法 WS は、この方向性を見いだす手法として実践されている。

地域診断法 WS のステップは、総合的な学習の時間の探求のプロセスと整合している。地域の本質的な特徴は何か？という課題設定からはじまり、ヒアリングやまちあるきで情報を収集し、整理・分析し、成果をまとめて、交流し、地域住民に向けての発表を行います。地域診断法 WS の一連の活動の中で探求のプロセスが「繰り返され」、児童の創造性が育まれるとともに、地域を知り、地域とのつながりも育まれる。

### 3. 総合的な学習の時間での実践

プログラムの実施に必要な時限数は 14 時限(45 分×14 コマ) とし総合的な学習の時間で実施した。ワークジョブを行うので、授業は 2 時限連続を基本に構成している。ただし、「まちあるき」は午前中 4 時限分を利用する。2018 年度 A 県 B 町立 C 小学校の実施事例では 6～7 月に 2,2,4,2,2,2 時限で実施した。なお、この時限数には地域への発表の時間、発表のための準備時間は含んでいない。地域診断法 WS を実践した、C 小学校の場合は、秋の全校学習報告会での発表をゴールとして、1 学期に地域診断法 WS を実施し、最終回に表現方法を議論・決定し、2 学期にはその準備作業を行っていた。

地域診断法 WS は、担任が一人で実施するものではない。学校側は、地域をフィールドとした学習を通じ児童が成長することをねらい、地域側は、将来を担う児童の意識づけや、地域と学校との交流による地域活性化をねらいとしている中で、双方が win-win の関係を構築することに意味がある。したがって、地域側の担当者を役場等に配置してもらい、連絡調整は役場で行ってもらう体制をとるなどの工夫が必要である。担当教員はじめ、学校側も実施体制を整え、地域とのコミュニケーションをとることが大切であるが、役割分担を明確にして、役場等に任せられるところは任せた方が実りある授業が実施できる。C 小学校の実践では、B 町役場の地区担当職員が、協力してくれる地域の人員の調整や、招待などを段取りする事でスムーズに行うことができた。

地域診断法 WS で用いる手法は「付箋をつかった情報整理方法」と「フィッシュボーン」の 2 つである。「フィッシュボーン」については、品質管理の手法としての特性要因図が類似の方法として存在するが、地域診断法 WS でのフィッシュボーンはオリジナルな手法である。これらはの作業はすべて、付箋、模造紙、裏移りのしない太いペンを使用する。一連の作業は、児童 1 人 1 人が意見を出しやすくする場づくりのために、①意見 や情報をたくさん出す、②多様な意見や情報を受け止め批判しない、③意見や情報から考えを広げるといったルールがある。

基本的な手順は、情報同士の関連性を整理していく。整理の方法としては、「情報のグルーピング」→「名札づけ」と、名札同士の関連性の解説・発想(つながりを考える)である。名札同士のつながりを考えることがポイントとなる。例えば、「山」と「川」が「なぜつながるか」を考えると「山」があって、そこに雨が降って、「川」に流れていく」という A と B の間に何かしらの作用 C を入れて結びつけるパターンや、「広い土地」があるから「農業」が盛んである、「農業」があるから「祭り」があるなど、A が原因となって B という結果があるという因果関係のパターンを、児童に示すと考えやすくなる。

地域診断法 WS では、最終型としてフィッシュボーン状に情報を整理する。フィッシュボーンでは、背骨が軸となって、その端に、尾びれ、頭が位置する。背骨からは枝骨が広がる。背骨＝地域にとって重要な要素、尾びれ＝重要な要素の根源的要素、頭＝重要な要素を統合した

内容という構成となる。

キャッチフレーズは、集めた情報とそれらの整理・分析の結果から、結論としてこの地域の特徴は何か？をひとことと言い表すフレーズである。語彙が少ない児童にとっては大変難しい作業となるが、何が大切であるのか、自分たちは何を伝えたいのかを考えさせ、自分たちのことばで地域を表現できるよう教員は支援する。

#### 4. 実践結果

C小学校において2018年度にプログラムを実践した結果、児童がどのような成果をつくり、思いを抱いたのか以下に記す。6年生は10名で1クラスであった。児童が在住している集落（地区）毎に5グループに分かれた。グループ毎の児童数は複数名の地域と1人の地域があった。全校での学習報告会は10月に行われた。

##### 4-1. フィッシュボーン（抜粋）

各グループの作成したフィッシュボーンのカッチフレーズは、「未来に継承したいKY地区の豊かな水と神々との暮らし」「未来に継承したいIS地区の人々のふれあいとIS地区を大切にしたい気持ち」「未来に継承したいKA地区の地域の人々のつながりが強い心」「未来に継承したいTO地区の自然が豊かで人々がおもいやる心」及び以下（D地区）の内容であった。

D地区 児童1名：「B町D地区は、

『未来に継承したいD地区の水と緑の豊かさや誰もがあたたかい気持ちでいられる暮らし』です。『山から見る景色がキレイ』は、高いところにあるお寺や神社から見る景色がキレイでした。『2つにわかれた地域』は橋から向こう側は昔からあるDで、橋から手前は新しく広がったDです。『自然が多いT山』では、いろいろな『植物』が生えてるし、草木が植えられています。たくさん『木』が植えられているので、木のアスレチックがあります。『きれいな水』は、山から出ている湧き水や魚が住みやすい環境があるからです。『土地に合わせた田んぼ』では、斜面が多いので、棚田が多いです。それに、心地よい風やきれいな景色があります。『優しい人』では、『地域の人』がすれ違おうと挨拶をしてくれます。『新しい人』では、外国人や子どもや若い人たちがDの魅力を知ってもらったり、行事にたくさん参加してくれたりします。『みんなが集まる行事』では、運動会は『地域の人々が交流する場』であったり、草むしり、地蔵盆、夏祭りは『子どもたちの行事』です。『水と緑の豊かさ』とつけたのは、『自然が多いT山』と『きれいな水』からです。（キャッチフレーズの）『誰もがあたたかい気持ちでいられる暮らし』は、『優しい人』があたたかい挨拶や、すれ違っただけで声をかけてくれること、『みんなが集まる行事』や『地域の人々が交流する場』もあるのでこうしました。この、今あるD地区のいいところを、未来にも継承していきたいと思いました。』



図1 B町D地区の成果

##### 4-2. 全校学習報告会での報告

全校学習報告会は、各学年が体育館の舞台に立ち、1年間の学びの成果を報告する形で行われた。6年生は「勝手に観光大使」と言うテーマで、プログラムで学んだ成果を活かし、一人ひとりが地域のキャッチコピーを設定し、地域のオススメポイントと、それを踏まえた各自の

アクションについて発表を行った。以下は3名の児童の紹介の中から、プログラムに関する部分を抜粋した内容である。

児童a「KAは、川や木、森や林など、自然がいっぱいあります。サルやキツネ、モグラなどの動物もよく見かけます。動物たちがたくさんいるので、自然の中はとっても楽しいです。川はキレイですが、ポイ捨てしてしまう人がいるから汚れてしまいます。だからわたしはゴミ拾いをしようと思います。わたしは、自然がだれにとっても大切だと思うので、KAの自然を守りたいです。また、KAの人はとっても優しいです。困っていることがあると助けてくれる人たちがいます。なので、キャッチコピーは『住めば都 KA』にしました。わたしはKAが大好きです。』

児童b「1学期、わたしたちは自分の字についての学習をしました。そのことからキャッチコピーを考え『自然を守ろう TMN』にしました。TOは、農業が盛んだということを知りました。また、自然がきれいだということも知りました。農業をするには、きれいな水が必要です。そのためにはきれいな自然も必要です。でも最近、ポイ捨てなどが増えてきているためゴミがあちこちに落ちています。だから、自然が汚くなりそうで少し心配です。なのでわたしたちにできることを考えました。小さいことだけど、自分たちがポイ捨てをやめたり、しっかりとゴミを持ち帰ることが大切だと思いました。」

児童c「僕が考えたTOのキャッチコピーは『守りたいこの景色 だから米を食べよう』です。1学期の学習でTOをまちあるきしたとき、西琳寺から見た琵琶湖がとてもきれいでした。それだけでなく、下を見るとTOの田んぼが広がっているのが見えて、のどかでとても良い風景でした。TOは米作りが盛んですが、僕の家でも米作りをしています。なので、毎年美味しいお米が食べられます。僕はこののどかな風景が守られるために、米作りの手伝いを続けたいと思います。みなさんもお米を食べましょう。』

## 5. 考察：学習プログラムの効用

学習プログラムの成果は、フィッシュボーンの結果から人の暮らしと地域環境とのつながりへの理解が読み取れる。例えば、D地区では景色や自然から優しい人や行事へのつながりを表現し、結論を導いている。他の事例も、キャッチフレーズには人や暮らしが現れているがそのつながりに地域の環境があることが表現されていた。これは報告会での報告からも確認できる。そして、報告会ではさらに地域と自分とのつながりを考え表現を行っている。例えばT0地区の景色と米を食べることのつながりの表現などである。これらの結果から、学習プログラムを通じて、児童の中に地域と自分自身のつながりをインプットすることができたのではないかと考える。今後は、更なる実践を重ねて、効用の確認とプログラムの改善を行っていきたい。

## 6. 参考文献

- 1) 住民基本台帳人口移動報告 平成30年(2018年)結果によれば、東京圏は13万9868人の転入超過。前年に比べ1万4338人の拡大している。<https://www.stat.go.jp/data/idou/2018np/kihon/youyaku/index.html>
- 2) 国立青少年教育振興機構(2010)「子どもの体験活動の実態に関する調査研究」によれば、「体験の力」と関係が見られる項目として小学校高学年では「地域活動」があっている。
- 3) 滋賀県立大学まちづくり研究室(2018)「質の高い教育環境づくりの実践 総合的な学習の時間で活用するための地域診断法WS実施マニュアル」B町平成29年度22号地域診断コンサルティング業務委託
- 4) 鶴飼修、小島なぎさ(2018)「小学校における地域まちづくり教育手法の開発」日本計画行政学会第41回全国大会要旨集, pp. 116-119

謝辞：研究の実施にあたり調整・支援いただいた町職員の皆様、ヒアリング等に協力いただいた地域の皆様、実践いただいたC小学校6年生担任の先生方をはじめ、校内研で議論いただいた先生、校長先生、教育委員会の皆様に謝意を申し上げます。本研究の一部は、博報財団「第13回 児童教育実践についての研究助成」を受けて実施した。